『中東で考えたこと―異文化理解の一視点』

講　演

講師：小畑紘一氏
2006 年 6 月 29 日

「中東で考えたこと――異文化理解の一視点」と題された小畑紘一・元大使による講演は、国際社会学科の学生たちが主な聴き手であることを念頭に、異文化を理解することの難しさと面白さ、そして大切さとを、具体的かつ平易な語り口で伝えるものとなった。

講演の冒頭において、小畑氏は中東のもつ多様性について、スライドを用いながら、都市も、砂漠も、緑もある風景を写し出し、聴衆サイドのステレオタイプ化された中東像にまず修正を迫った。また、宗教という側面からも、中東ではイスラム教、キリスト教、ユダヤ教などの諸宗教が入り乱れており、非常にバラエティーに富んだ地域であることに言及する。さらに、民族的な面から、セム語族系以外に、ペルシャ系やトルコ系、その他アルメニア人やチェチェン人までもが住んでいる事実も指摘して、その地域的多様性についての説明を裏づけた。

次に、現在のアラブ社会の混迷、不安定さといった点に議論は展開していき、その不安定要因に関しては、主にイスラム教自身およびアラブ国家自身に目を向ける見方が提示された。例えば、世の中の変化や現状に合わせて法解釈をしようという考え方に対して、イスラムにとって理想的な社会とされる 7 世紀前半を想い、「原点に返れ」という考え方が根強く存在していることである。また、アラブ国家が現実には国民に幸福をもたらすことができず、過去においてもアラブ人が帝国をつくった歴史がほぼないことも指摘された。

最後に、小畑氏は、主に学生たちに向けて、できるだけ早く、思い切って海外に出てみることを薦める。そして、異文化と接した時の驚き、違いを見極めていくことの重要性、「日本とは？」「日本人とは？」「自分とは？」といった素朴な問いかけの大切さにふれ、その論を結んだ。

〈抄　録〉

飽戸氏：　学長と生涯学習センター長を勤めさせていただいております、飽戸といいます。今日はお忙しいところ、ご講演いただきましてありがとうございます。それから皆さんもようこそいらっしゃいました。ひとことだけごあいさつさせていただきたいと思います。

十数年前ですか、南部の町を歩いておりましたら、公園の隅にひとつの石碑がありました。読みましたら、「南部の文化と伝統価値を蔑視し、武力によって壊滅させた東部のヤンキーどもの蛮行を忘れるな」と書いてあるんですね。公園のちゃんとしたところにある、立派な石碑なんです。アメリカ人の友人に「こんなことをこんなところに書いてもいいんですか？」と聞きましたら、「この辺の人はみんなそういう風に思っているからいいんですよ。南北戦争はまだ続いているんですよ」といわれました。ひとつの文化を理解するというのは、いかに大変なことかということを痛感した次第です。今日は最適のテーマで、最適のタイミングに、最適の先生をお迎えして中東問題についてお話いただけます。われわれ日本人にはなかなか理解できないことばかりでございますので、楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：　次に、現代史研究所長の栗林先生から、小畑先生のご紹介をしていただきたいと思います。お願いいたします。

栗林氏：　現代史研究所長をしております、国際社会学部の栗林でございます。本日はこの講演会にお集まりいただきましてありがとうございます。

現代史研究所の活動といたしましては、日常の調査研究活動の他に、年に数回くらいシンポジウムとか講演会を催しておりまして、今日はそのひとつでございます。

小畑大使は、慶應大学経済学部を卒業されまして、それからすぐ外務省に入省されました。これは、当時は外交官試験といわれていたものです。これは、慶應大学では比較的パイオニアで、3 番目か 4 番目ぐらいの外交官が生まれたわけであります。すぐにケンブリッジ大学に行かれて、ケンブリッジ大学で主として語学研修という形で、2 年間おられました。それから、その後、メルボルン総領事になられたり、ウズベキスタンの大使をされたり、そして、つい最近は 2002 年にヨルダン特命全権大使を勤められております。2006 年、今年、外務省を退職されまして、筑波大学の大学院の非常勤講師など、また来年からは別の大学に非常勤講師でお勤めになるということも伺っております。非常に学究肌といいますか、そういうタイプの大使でありまして、特に 2003 年には國學院大學の文学部神道学科――夜間でありますけれども――お仕事の傍ら、この神道学というのを勉強されて、卒業されておられます。これは、日本の伝統的なものは何か、ということを一度じっくり勉強したいということで始められたそうで、見事卒業して、それからヨルダン大使になっておられます。以上、簡単ですけれども、小畑大使の略歴を紹介させていただきました。外交分野における長年の豊富な経験から、異文化理解の視点についてお話いただけるということを期待しております。どうぞよろしくお願いします。

【中東とはどのようなところか】

小畑氏：　ただいまご紹介いただきました小畑でございます。今日はいただいた題名が『中東で考えたこと――異文化理解の一視点』ということです。

私はこの 2 月までヨルダンに 3 年 4 ヶ月間勤務したが、中東との関わりは 1980 年代前半からありまして、中東というものは私のこれまでの外交官生活で大きな位置を占めてきました。今日は、中東で今なにが起こっている、イラクで何が起こっている、あるいはパレスチナで何が起こっているというお話よりも、私が中東で、見て考えたことをお話させていただきます。この方が、皆さんが、今後ご自分で中東を見る際に参考になるのではないかと思います。そのポイントは、第一に中東の多様性、第二にアラブ社会の不安定さの原因ということです。

初めに、中東の概略をご覧に入れます。

これが、私がおりましたヨルダンの首都、アンマンです。ここに立っている国旗は高さ 143 メートルで、ギネスブックに載っているという旗です。この旗自身は日本製だそうです。アンマンは 7 つの丘から出来ているといわれて、非常に丘の多い地域です。アンマンは、近代的な町です。そもそも、ここ中東の国の多くは、文化面では歴史はありますが、第一次大戦により、この地方を 400 年にわたり支配していたオスマン・トルコ帝国が崩壊した後出来たという経緯からもお分かりのように、国としては歴史が浅いのです。ヨルダンも例外ではありません。ヨルダン南部のワディ・ラムという砂漠は、サウジアラビアまで続いています。私がヨルダンで最も好きな場所で、よく週末になると、テントを持って過ごしました。満天の星空、「音のない世界の音」の魅力に取り付かれた場所です。こういう砂漠が中東の典型的景色とすれば、また、こういう青々とした景色も中東です。日本では、中東というと、「砂漠」、「駱駝」というのが典型的なイメージかと思いますが、実はもっと多様な風景があるということも知っておいて頂きたいと思います。

ヨルダンにはローマ時代の遺跡、ギリシャ時代の遺跡もあります。そもそもアンマンはギリシャ時代に作られた町です。中東には非常に長い歴史があり、その中でいろいろな民族が住み、行き来していました。生活においても都市の生活から、先ほどの砂漠での遊牧民の生活まで、多様です。

こちらがヨルダン、あちらがイスラエル、正確に言えばヨルダン川西岸は、パレスチナ人が住む土地です。「中東問題」の地です。ヨルダンとイスラエルの国境に架かる橋、アレンビー橋のアレンビー

中 東

とはイギリス軍の将軍の名前で、1917 年 12 月にエルサレムを奪還した人です。十字軍以来始めてキリスト教徒がエルサレムの主人になったということです。ヨルダン川は、イエスが洗礼者ヨハネにより洗礼を受けた河としても有名です。その場所は、この橋の近くです。なお、この橋は、10 年くらい前に日本の援助で架け替えられました。1994 年ヨルダンとイスラエルが平和条約を結び、その後両国の交流が増加するだろうという雰囲気が出てきて、老朽化した橋を新たにしたわけです。こういうことも日本の経済援助でやっております。

橋を渡って向こうへ行きますと、イスラエル側のパスポート・コントロールです。兵が鉄砲を持っていて、結構緊張します。バスなども徹底的にチェックされています。

国境を通過して、すぐある街がジェリコです。聖書に詳しい方は知っておられると思いますが、今から三千年ほど前、モーゼの一行がエジプトを出て、40 年かかりシナイ半島をわたって死海の淵まで来て、そして、このパレスチナの地に入るわけです。その時、パレスチナで一番初めに到着した街が、このジェリコで、旧約聖書にこの時の戦いの模様が詳しく書かれています。町の入り口にチェックポストがあります。イスラエルの兵が管理していて、車の一台、一台をチェックしています。最近では、大分チェックが緩くはなりましたが、時には何時間も検問をやったりして、パレスチナ人をいらだたせています。大変なところです。時々ここで、爆破事件があります。

ジェリコの街の中を私が初めて訪れたのが、2002 年でした。その時はまだイスラエルの警備が厳しくて、街は死んだように静まり返っていましたが、最近になり、イスラエル側の警備も緩み、観光客が戻ってきています。街の中では、店の前で男どもがおしゃべりしていたり、羊を飼っている人たちが行き来したり、子供達が遊んでいたり、路上でパンを売っていたり、日常生活が戻って来ています。

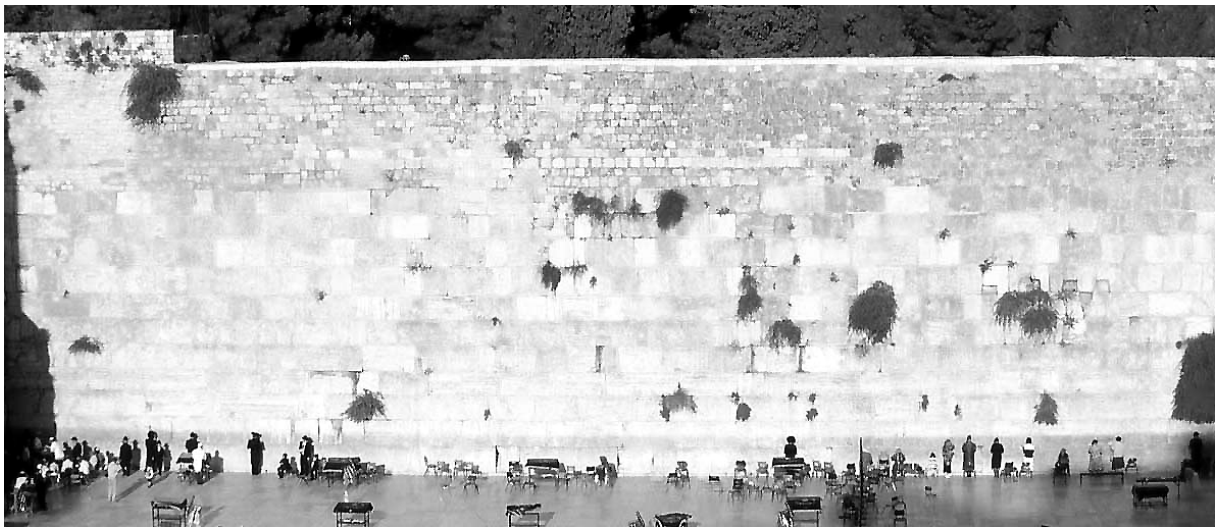
今、日本政府は、イスラエルとパレスチナの平和促進のために、ジェリコの開発の手助けをしようとしています。多分今度、小泉総理（2006 年当時：編集部注）がこの地を訪問されたら日本の開発援助について、何らかの発表があるはずです。

ジェリコの近郊は、悪魔がイエスを誘惑しようとした地としても有名で、キリスト教徒にとっては

意味のある地です。深い渓谷には４世紀ぐらいに建ったキリスト教の修道院があり、今でも修道士が住んでいます。面々と歴史が続いていることを実感します。

パレスチナ人の住むある街は、イスラエルが作った分離フェンスで囲まれています。この壁は、イスラエルに言わせれば「テロリストたちが自分達の領土に入ってくるのを防ぐため」ということで作られたわけですが、住民にとってはとても受け入れられるものではありません。ある日自分の家の前に突如、高さ８メートルもある無機質なコンクリート製の壁が出現したら、皆さん、どんな気持ちになりますか。また、町によっては、壁でぐるりと囲まれ、出口が１箇所というところもあります。いままで目と鼻の先にあったところに行くのに、壁のお陰で遠回りを強いられるわけです。ことほど左様に、住民の生活は麻痺状態です。また、この壁は、所によりパレスチナの領土に食い込んで建てられています。その違法性については、国際司法裁判所、更には、イスラエル自身の裁判所が指摘していますが、今のところイスラエル政府は聞く耳を持ちません。やはりこういうものはパレスチナ人のイスラエルに対する不信感、憎悪の感情を植えつけるものです。自衛のためには、手段を選ばず、というのがイスラエルの方針です。

エルサレムは城壁で囲まれています。今見る城壁は、今から500年ぐらい前にオスマン・トルコ帝国によって作られました。ここは、キリスト教、ユダヤ教、そして、イスラム教の３つの宗教の聖地です。誰が、どの宗教がエルサレムの主人となるかで、エルサレムを紛争の地にしているのです。



嘆きの壁　　ⓒLITHON

有名な“嘆きの壁”は“西の壁”と云われています。1967年の第３次中東戦争の時に、イスラエル側がこれを奪いました。それまではユダヤ教徒はここに行けなかったものですから、“嘆きの壁”といっていたのです。この壁は、ユダヤ教の神殿が建てられていた、“神殿の丘”の一部で、ユダヤ教徒にとっては、聖地です。“西の壁”の前でユダヤ教徒が祈りをささげています。壁の左側が男性用、右側が女性用です。

これが“神殿の丘”の内部で、現在ではユダヤ教徒は入れません。それにも拘らず、2000年９月、当時のリクード党の党首、前の首相のシャロンがここに入って、イスラム教徒の怒りを買い、第２次インティファーダと呼ばれる、パレスチナ人の抵抗運動が始まったのです。それは、現在も続いています。

“神殿の丘”にある、有名な黄金のモスクは今、ヨルダンの王家のハシミテ家が管理しています。要するに修理などの場合、ハシミテ家が全部お金を出しているのです。黄金のモスクは、ここからムハンマドが神に会いに行ったと云われているところで、イスラム教徒にとって聖地です。これは、“神

殿の丘”にあるアル・アクサルという名のモスクで、イスラム教徒にとっての重要なモスクです。ここで、1951 年ヨルダン国王が暗殺されたりして、血なまぐさいモスクでもあります。

イエスが磔になったゴルゴタの丘を囲む形で立てられた聖墳墓教会は、キリスト教徒にとっての聖地です。教会の外に出てみますと、イスラエルの兵がずっと警備しています。平和と戦争が同居しているというか、非常に緊張感のある街です。過去の歴史が、何か事件があるとすぐ蘇り、イスラム教徒とユダヤ教徒が互いの憎悪を掻き立て、争いを誘うところです。そして、三つの宗教の神が、それぞれ呼び方は違うにしても、同じであることにも、問題を複雑にしている原因ではないかと思います。

今度はシリアをご紹介します。ダマスカスは、7 世紀、8 世紀の頃ウマイヤ朝という王朝の首都が置かれたところです。イスラム教の創始者ムハンマドが死んだ後、初めて出来たイスラムの国です。その街の真ん中に大きなモスクが建っており、その前に今、人が立ちならんでいます。このモスクにシーア派の殉教した人が祭られており、その関係で、多くのイラン人がここに巡礼に来ます。イラク戦争の時も変わることなく来ていました。モスクの前のバザーでは両側にお店が並んでいて、まさに門前市を成しています。お店では、いろいろなものが売らています。女性のスカーフ専門店もあります。イスラム教徒の女性にとっては、なくてならないものです。女性たちは、スカーフの色と服装の色との配色を考え選びます。ファッションには非常に敏感です。これはナッツとかのドライ・フルーツを売っているお店です。中東というのは面白くて、看板に、大きく絵が描いてありまして、それでその店に何が売っているかがすぐわかる仕組みになっています。普通の店があるかと思うと、突如鍛冶屋さんが一軒ポンとあって、そこで刃物を作っています。中東の食べ物では、非常に香料をうまく使って料理をしています。このように、中東というところは非常にバラエティに富んだ社会です。

ダマスカスは、1400 年も続いている街で、イスラムの色の濃い街ですが、他方ここには、キリストの伝道に尽力した聖パウロがいたところでもあり、キリスト教徒にとっても非常に重要な街です。道路の両脇に並ぶ家の壁には、イエスの肖像を掲げたり、あるいは街の路地の一角に、祈りの場所を設けたりということで、まさに宗教が入り乱れて存在しています。モスクのすぐ隣あたりにある、アニヤニというキリスト教の教会です。4 世紀の初めくらいに作られた教会で、その地下に礼拝堂があります。これは、世界でも最も古いキリスト教の礼拝堂のひとつではないかといわれています。

【中東の多様性と同質性】

今の写真を見てもお分かりの通り、中東というのは、いろいろな面で非常に多様性に富んでいるところで、住んでいても面白いところです。

「中東というのはどういう国ですか」という質問に対し、一般には、例えば「中東はイスラム教の国です」とか、「石油の国です」とか、「砂漠の国です」とか、「治安が悪い国です」とか、ひとくくりで表現される人が多いです。しかし今、写真でご覧いただいたように、宗教にしても、ユダヤ教があり、キリスト教があり、そして、イスラム教があります。世界の人口の半分の人が信じている 3 つの一神教が生まれた地です。また、これらの宗教が生まれる以前、紀元前 7 世紀位に、世界最古の啓示宗教であるゾロアスター教という宗教が、生まれた地でもあります。さらに、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教といっても、それらは一枚板ではなく、多くの宗派が入り混じって存在しています。例えば、キリスト教を例にとれば、ローマ教会、ギリシャ正教、コプト教会、アルメニア教会などなど、非常に多くの宗派の人々がおります。また、イスラム教にしても、スンニ派とシーア派に大きく分かれ、シーア派は、更に、十二イマーム派、ザイド派、ドールズ派、イスマーイール派とかいろいろな派が混在している。また。民族的にも、セム族系の人たちだけではなくて、イランを中心としたペルシャ系の人もおれば、トルコを中心としたトルコ系の人、或いはクルド人、ユダヤ人と多種多様です。例えばヨルダンに赴任して、知ったのですが、そこにはアルメニア人とか、あるいはシルケィジアンといって、コーカサス系の人達が生活しているのです。彼等は、ロシアなりトルコなどに、宗教的、民族的理由で迫害を受けて、逃げてきた人達です。エルサレムには、アルメニア人区域がありますが、その名残です。こういう人たちが中東に何百年に渡って流れ住み、社会を動かす大きな原動力になっ

てきました。ヨルダンのアンマンにある王宮に行きますと、ロシアのコサック兵のような、黒い毛の帽子をかぶった近衛兵に出くわします。これなど、まさにコーカサス系の人達です。これはヨルダンの王家、ハシミテ家が 1920 年代にサウディから移り住んだ時、この人達がハシミテ家を援助したため、この貢献を記念し、現在でも、このような待遇を受けているのです。また、文化・社会にしてもアラブ人の文化・社会のほか、トルコ人の、ペルシャ人の、３つの文化・社会が存在します。同様に、地形にしても、緑の穀倉地帯もあれば作物が殆ど育たない砂漠地帯もあり、変化に富んでいます。私が勤務したヨルダンは、アンマンから車で３時間も走れば東西南北の国境に到達してしまうほどの小さい国ですが、世界で一番低地にある死海あり、砂漠あり、春には花が咲き乱れる丘陵地帯あり、という具合に地理的には日本以上に変化に富んでいます。ですから皆さん方も“中東”ということで、一つの言葉で断定しないで下さい。とても多様性に富んでいます。その多様性に目を向けて初めて、その社会のいろいろの姿がはっきりと目に浮かんできます。社会における多様性というものをよく認識していただくことが、異文化理解の第一歩ではないかと思います。

いままで、中東社会の多様性について述べましたが、でも、その中にも、中東の人々に共通する、何ものかがあることも確かです。例えば、人の行動について、このアラブの社会においては“IBM”という言葉があります。“I”というのは“インシャラー”といって「神の思し召しを」という意味ですが。約束は、全て神の意志により実現されるということです。“B”は“ブクラ”で「明日」という意味です。何かする際「では明日やりましょう」となるのです。最後の“M”は“マレージ”、英語で“ネバーマインド”です。「何があっても気にするな」ということです。これらの根底にあるものは、この世の全ては神の意志で作られているので、人間は何もすることは出来ない、何が出来る、出来ない全ては、神の意志である。というイスラム教の教えです。ですからイスラム教徒は、これを当然視するわけですが、この世のことは人間が決定していくのだとする文化に育ったものにとっては、極めて不安定な状況におかれるわけです。“IBM”の文化というものは、この地域全部に共通していると感じます。ただ今の３つのことも、日本人が、アラブの人と約束する時「もし、神の御心があればそういうことをやりましょう」と言われると、日本人は「なんか、この人は誠意がないな。自分の言い逃れをしているんじゃないか」という風に考えてしまうのですが、ただ、これはコーランにも書いてありまして、「将来の約束をする時は必ず“インシャラー”という言葉を入れなさい。“全てこの世は神が創っているんだ”ということを認識した上で、毎日の生活をしなさい」ということなのです。また、「気にしない」という表現も、「全てが神の意思によってなされていくのだから、いくら人間が努力してもかなわぬところがあるのだよ」という意味と理解していくと、彼らのいう“IBM”もそれなりに理解できるのではないかなと思います。

イスラム教、アラブ社会に関する知識があれば、この地域の人達の言動を理解できる余地は十分にあります。要するに、ひとつひとつの彼らの行動、言葉は、土地の文化なり、歴史に根ざしたものです。例えば、人は、「イスラム」ときくと、すぐ、「イスラムの人は、或いはアラブの人は４人まで奥さんをもてるんですね」といいます。確かにコーランにはその通り書いてあります。これはムハンマドが生きていた、６世紀、７世紀の社会状況を表しているのです。当時は、戦いが多く、男性が死んでいく率が高かったわけです。そこで、未亡人を救済するために、こういう制度を設けたのです。と申しますのは、アラブの社会では、女性は男性と同等には扱われません。女性は、男性の従属者であり、男性が庇護すべき者として扱われています。ですから社会生活をする際も、男性の庇護がないと女性は一人前に生活が出来ないのです。ですから戦争で夫を亡くした女性にとっては、一人で生きていくとなると極めて過酷な世界がそこにあるわけです。そこで、心ある男性が未亡人を奥さんにすることによって、未亡人は、一人前の人間として扱われ、生活できるのです。アラブの一夫多妻制度とは、このような意味が隠されているのです。道徳的に良いか否かという問題ではないのです。

皆さんも外国に行った時日本の常識と違うものにぶち当たり、非常に驚かれることがあると思います。それを単に驚きというだけ、あるいは「日本と違うわ。そんなのおかしい」という反応に留める

ことなく、その裏に隠されている意味、現地の人達の習慣、道徳等に思いを馳せて見てください。現地の人達にとっては、我々がおかしいと思っている言動は、理由があってのことなのです。その理由がどういうものであるのか、をまず知る努力をすることです。この「知る」ということが、異国の人・文化を理解する第一歩だと思います。彼等の言動の意味を知ることで、我々は、彼等を理解し、彼等との対話が可能となり、我々にとり非常に身近なものになってくるのではないかなと思うのです。

同様なことですが、また、日本人には、アラブ人はお酒を飲まない、という神話があるようです。でも、皆さん、土地の栄養価の乏しい中東の地では、葡萄にとって最良な土地です。アラブでは良質の葡萄が生産されます。例えば、葡萄のひとつの種で“シラーズ”というのがありますが、これはイランの南部の地方の名前で、まさにそこで、昔から良質のぶどうが採れ、ワインも生産されています。アラブの人々も、当然にワインは飲みます。「アラブ人＝イスラム教徒＝酒は飲まない」といった固定概念で、アラブ人を見るのは間違っています。人間を、ひとつの宗教とかイデオロギーで規定しまうことは出来ません。もっと、人間は複雑です。まず「生きた人間」として見て、付き合ってみることです。そうすれば、驚くようなことは、少ないでしょう。固定概念で見るな、ということも、異文化理解には重要と思います。そういう風に、見ていけば、驚くことはあるでしょうが、最後は、「ああ、彼等も、我々と同じような喜怒哀楽のある人間なんだな」という結論に至るのではないでしょうか。そうすると、そこに、すべての人達に対する同胞意識というものが生まれてくるのではないでしょうか。

【アラブの不安定要因】

アラブ・イスラム社会は、20 世紀の後半は、4 度の戦争があり、また幾度となくテロ行為が続いている不安定な地域です。私は、この地域の不安定性には、二つの要因があると見ています。第一は、イスラム教自身に内在する要因ともう一つは現在の国家というか政府のありようです。

第一の要因については、こう考えます。ご承知の通り、イスラム教は、6 世紀から 7 世紀に生存したムハンマドという人が神の啓示を受けたことにより始められた宗教です。イスラム教の特徴の一つは、キリスト教とは違って、「ムハンマドは最後の預言者である、そのあとには、誰も改革や世直しをする人は出現しない。ムハンマドが神の言葉として示した世界は、最も完成された姿であり、これに修正を加えることが出来るのは神しかいない」ということです。イスラム教徒の人達は、これを「信仰告白」という形で信じなければいけないのです。

イスラム教の提示する世界は、神はアッラーしか存在しない。神と人は信仰により結ばれ、あらゆる人は神の前では平等である。ということです。これは、ムハンマドの生きた 6、7 世紀の社会にとっては、画期的な考えでした。つまり、当時は多神教が横行し、人々は血縁関係による結びつき、つまり部族社会の中で生きていたのです。これに対し、イスラム教は、多神教を精神の堕落と見、部族社会を社会の悪と見、この二つの慣習を打破して、一つの神をあがめ、神の前の平等な共同体を生み出そうとしたわけです。そして、後世、イスラム教徒が最も好ましい状態で生活しえた社会は、ムハンマドの生涯の後半から、ムハンマドの代理人カリフが選挙によって選ばれていた 7 世紀の中ごろまでの時代の社会、つまり 7 世紀前半の社会であったとしているのです。この社会は、信徒の数も少なく、また共同体の構成員が殆どアラブ人であったが故に、コーランの教えに基づいた、平等な、平和な社会であったとされています。コーランが生活全てを律する社会であったわけです。

ところが、イスラム教が広まってくると、そこにはアラブ以外の人々・慣習が混じりこんでくるわけです。更に欧米諸国が、もともとイスラムの世界であったところを植民地化してくると、イスラム以外の法が適用されてくるわけです。つまりは、イスラム社会が非アラブ的要素を抱え、変質してきたわけです。普通であれば、宗教は時代の変化に合わせて解釈され、時代に適応していくのでしょうが、イスラム教の場合は、前にお話したように、コーランの世界が、それ自身で完成したものなので、新たな解釈は許されないのです。特にスンナ派は、「ムハンマドの慣行と正統な共同体を維持」することを目的としていることからもお分かりの通り、この点極めて保守的です。そういうことで、イスラムの社会においては、既に 10 世紀に、コーランを「時代の状況に応じて解釈する」ということは禁止

されました。そこでイスラム社会は、「イスラムの純粋性」を保とうとすると、「イスラムの原点に戻れ」ということになるのです。原点というのは、イスラム教徒が「理想の世界」とする社会、それは、先ほど申した、ムハンマドが生きていた時代、ムハンマドの考えがまだ生々しく人々の胸に刻まれて、イスラムの法が生活の全ての本であった時代の社会でその原点に戻ろうとするわけです。これが「イスラム回帰」といわれる現象です。「イスラム回帰」というのは、現在盛んに言われている現象ですが、これは何も現在に始まった現象ではなく、イスラム世界が非アラブ世界まで拡大していくと共に始まった現象です。これは、「コーランに忠実な生活を送ろう」ということですから、原理主義です。現在「イスラム原理主義」というのは、テロの代名詞のように使われていますが、その元をたどれば、「コーランに基づく生活をする」という、イスラム教徒にとってはしごく当たり前のことを意味しているだけなのです。

こう考えると、私は、テロ行為を容認するものではないですが、テロリストがやっていることも、イスラムという思考体系の中では極めて整合性の取れたものだといわざるを得なくなります。彼らの中の極端な人たちは、「自分達は今、非常に、居心地の悪い状況の中にいる。それは、イスラムの教えで律せられるべき社会に、異文化の思想が入り込んでいるためである。イスラムの社会をイスラム的であらしめるためには、イスラム教徒の住む世界では、イスラムの法のみが支配するべきである。非イスラム要素を追い出せ」と考え、暴力的に状況を変えようとするわけです。暴力的でないにしても、イスラムの社会を原点に戻すということでは、社会の改革です。この、改革の思想はイスラムの教えそのものに内在しているといえます。ただ、この改革がイスラムの社会にとどまる限りは、国際的なインパクトは少ないのでしょうが、「イスラム社会を毒する不信心の異教徒を撲滅せよ」となると、話は別となるのでしょう。

「不信心者の撲滅」とは、イスラム教徒にとっては、「ジハード」（聖戦）と呼ばれる行為です。イスラムを守るという行為は、彼等の義務でもあります。ここで厄介なことは、「不信心者」とは、誰か、誰がそう決めるのか　という問題があります。イスラム社会おいては、例えばカトリックの教会みたいに、法王という人が居て、その人が法解釈において絶対であるという、そういう、権威付ける“人”、あるいは“機関”というものは、存在しないのです。イスラム教においては、神の前では人間は皆平等ですから、神との関係において、あの人は偉い人とか、そうでないとかといった概念はないのです。ですからイスラム教においては、その教典たるコーランを誰でも自由に解釈することが出来るのです。そして、その解釈に賛成する人がひとつのグループを作って行動を始めることが出来る社会です。ですから、イスラムの社会では、誰かが、「あの国は、けしからん」あるいは、「あのイスラム教徒は、不信心である」といい、それに賛同する人があれば、攻撃の対象となるのです。オサマ・ビン・ラディンのテロなどは、その典型ではないかと思います。コーランでは、特に不信心なイスラム教徒に対する罰は厳しいものがあります。イスラムの社会では、「あの人は不信心である」というレッテルが貼られれば、その人は社会から追放されていく、場合によっては殺されるということにもなりかねないのです。ここにも、イスラム教社会の不安定要因を見ることが出来ます。

この地域の不安定要因の二番目についてお話します。それは、国家ないし政府のありようの問題です。ムハンマドは、当時部族という「血縁」により結ばれていた社会を、神の前では、人は皆平等であるという考えで、神を中心とした社会を作ろうとしました。ここに、部族に替わる宗教を媒体とした共同体が形成されるわけです。イスラム教徒にとっては、ムハンマドが生きた時代を、共同体の最も理想とした姿が存在した時と考えています。ところが、その後、「国家」が生まれ、今までイスラム教により結ばれていた地が再編成されるわけです。「国家」は、その地に住む人々を統合するための正統なる理論を、宗教とは別なところに求めなくてはならないわけです。つまり、国家は、国民を「イスラム教」以上に魅力的なもので惹きつけなくてはいけないのです。もし、国家の拠ってたつ理論が、イスラムの住民に魅力的でないならば人々は、自分達を結びつけるものをイスラムに求めてしまうことになるのです。「イスラムの共同体」、これは、国家を超えた共同体です。国家の崩壊です。つまりこういうことです。理論というより、実際的な面からお話しましょう。国家に求められることは、い

ざという時国民の生活を保障することにあると思います。それは、つまり、国家が、国民が病気になった時、失業した時、生活に困った時に、ちゃんと保護を与えるということを意味すると思うのです。つまり人が失業した時に「はい、失業保険です」、「生活が困りました」「はい、生活保護をあげます」というようなことです。日本においては、政府はこの機能を、100％とはいわないまでも、十分に果たしています。

ところが、多くのアラブの国、――湾岸諸国の金持ちの国は別として――石油のない国は財政的に非常に大変で、とても国民の生活を保護することが出来ていません。そうなると、国民にとっては、いざという時面倒を見てくれない国家って、いったい何のために存在するのかということに疑問をもってしまうのです。彼らにとって外交とか、国防とかいうのは目に見えない世界ですから、それを国家がやっているという意識はあまりないのです。それよりも日常の、今日困った時にどう助けてくれるか、という視点でもって国家というものを見た場合、今の国家は国民を幸福にさせてくれる力はないと見てしまうわけです。そうすると、人々は、生きていかなくではならないから、誰かに頼らざるを得ないのです。このとき登場するのが「部族」です。「部族」はアラブの世界においては、昔から存在する生活集団の単位です。確かに、ムハンマドは「部族」による、人々のつながりを否定しようとしましたが、現実にはアラブの社会では、「部族」は存在し続けてきました。人々は、国家が無能な場合には、自分達の生存を曲がりなりにも保障してくれる、「部族」に頼らざるを得ないわけです。「部族」は、国家とか国境を超えた存在です。そうすると、国家とか、国境とかいうものが壊されていく危険性があるのです。国家がしっかりしていないと、社会が不安定化してきます。これは、なにも中東に限ったことではありません。不安定化している地域の国家は皆こんな状態ではないでしょうか。健全な国家の建設ということは、社会の安定化にとって極めて重要なわけです。この意味で、イラクの安定のために、一日も早く政府が健全に機能することが待たれるわけです。

国家の拠ってたつ理論に関連したことですが、この地図をご覧になって、国境を皆さんどうお考えになりますか。アルジェリア、リビア、エジプト、イスラエル、ヨルダン、シリア、イラクと国境はほぼ直線です。クウェートなんかもまさに直線です。イランとイラクの間、シリアとトルコとの間はわりにくねくねしています。普通国境は山とか、川とかの自然の障害物が国境となっています。その点からすると、中東諸国の国境は、異様です。これは、国が人工的に作られたことを意味します。まさに、現在の中東諸国の多くは、1920 年代に、オスマン・トルコ帝国の崩壊を受けてイギリス、フランスにより、人工的に作られた国々です。ということは、この地域に、この国家がなければいけないのだ、という国家の存在理由が乏しいということです。そこへもってきて、国家が国民のために十分な施策が出来ていないとすれば、国民は、何のために国家のために、例えば税金を払う必要があるのか、ということになるわけです。国民にとり、国家を必要とする意識が薄れてくるわけです。これも、社会を不安定化させている要因ではないかと思います。

【不安定要因としてのパレスチナ問題】

中東は、400 年にわたりオスマン・トルコの支配が続いてました。19 世紀の末になると、英・仏・露は、オスマン・トルコ帝国を倒して、この地を自分達の植民地にしようとしました。この時代は、いわゆる帝国主義の時代でした。イギリスは、トルコを倒すために、土着のアラブ人たちを自分の味方にしようということで、このアラブ人たちに「もしオスマン帝国が崩壊したら、あなた方にこの土地を与えるので、あなた方の王国を建てなさい」という約束をしました。2 番目は、ユダヤ人に対する約束です。当時はユダヤ人にとり受難の時代でした。特にロシアにおいては、大規模なユダヤ人迫害がありました。また、フランスに於いてもドレフュス事件の如くユダヤ人というだけで迫害を受ける事件が起こりました。一部のユダヤ人は、迫害から逃れるために「神が約束した地、パレスチナ」に行こうというシオニズム運動を起しました。このユダヤ人に対し、英国は「オスマン・トルコ帝国が崩壊した暁には、パレスチナの地に、あなた方のホームランドを作ります」という約束をしたわけです。ところが更に、そのような約束をしながら、イギリスは、フランス、ロシアと共に、中東を 3

ヶ国で分割する協定を密かに作っていたわけです。これがサイクス・ピコ条約といわれるものです。ですからイギリスは、オスマン・トルコ帝国打倒のいために３枚舌を使っていたわけです。第１次世界大戦が終わり、オスマン・トルコ帝国が崩壊した時にどういう社会が出てきたかというと、今皆さんがご覧になる地図の世界が出来たわけであります。つまり、イギリスとフランスが、隠密に領土分割をやった結果が現在の中東の国々なのです。三枚舌外交が示すように、ここには矛盾が含まれているわけです。その矛盾の結果が現在のパレスチナ問題を生み出したわけです。要するに、長年パレスチナ人が住んでいた地に、「ここは、神が与えてくれた地だ」といって、ユダヤ人が割り込んできたのです。パレスチナの地にユダヤ人国家の建設を認めたイギリスも、追い出されたパレスチナ人がどうあるべきかということには、何の考えもなかったようです。イスラエル国家が 1946 年に正式に出来ると、アラブ人が猛反発して、現在までに４度の戦火が飛びかいました。領土の取り合いです。この戦いは、現代まで続いています。

パレスチナ問題というのは、アラブ社会を不安定にさせる、大きな要因になっています。第二次大戦後のある時期までは、「パレスチナ問題は、アラブの共通の問題だからアラブで全部処理しよう」と、アラブが団結して問題処理に当たろうとした時代もありましたが、いつのまにか各国がそれぞれ自分の有利なようにこの問題を解決しようという動きになってきたのです。つまり、パレスチナ人のためにパレスチナをどうするか、ということよりも、このパレスチナ問題によって、自分たちが国の存在を害されないようにするにはどうしたらよいかとか、あるいはこれによって利益を得るには、どうしたらよいかいう考えに変わっていったのです。そのため、現在では、アラブの団結などということが望めなくなってしまったのです。ここで問題が起こることにより、アラブ国家の分裂が起こるわけです。アラブ社会の安定化のためには、パレスチナ問題の解決は重要です。問題解決のための当事者たるパレスチナ、イスラエル双方の努力は勿論ですが、域外国として唯一力のある米国の果たす役割は大きいです。しかし、この問題に関して、米国が公平なる仲介者でないということは不幸なことであると思います。

さらに言えば、戦後の中東の人々は精神的に非常に大変な時期を経験してきています。特に今、中東の人々は「自分達が何をいっても、やってもアメリカが自分を押し通し、結局は自分の思うとおりにやってしまう」という絶望感なり閉塞感に包まれています。また、世界のどこかでテロがあると、すぐ世界が「あれはイスラム教徒がやったんだ、けしからん」といって、世界的にたたかれます。こういう状況の中で非常に孤立感を持っているわけです。そのような、状況の中で、彼らはどこにいくかといえば、宗教に自分達の心のよりどころを求めていくということになってしまうのです。これが、所謂「イスラム回帰」です。ただ、これが心の問題で、そこにとどまっている限りであれば、問題はないのですが、「心の平和、地の平和が乱されるのは、イスラムの世界にアメリカがいるから、非イスラム的要素が存在するからだ。だから、それを追い出せば、イスラムの法が支配する世界をこの世に再現させることができるのだ！」といって、暴力に訴える人も出てくるわけです。非イスラム世界の人からすれば、これはテロです。でもイスラム教徒の人から見れば、コーランの世界の再現ですから、理にかなっているのです。この両者の見解の相違は、対話により、忍耐強く縮めていくしか道はないのだと思います。アラブの国を民主化すれば、ことは良い方向に進むであろうとの考えが欧米にあります。西側の民主主義の概念は、リンカーンの言葉で言えば「人民の人民による人民のための政治」に代表されるものです。主権は、“人民”にあるのです。これが民主主義の根幹です。しかるに、イスラムの社会では、主権は「神」にあるのです。「この世の全ては、神の思し召しである。人間が人間社会のことを決めるなどということは神の摂理に反する」、というのがイスラムの教えです。このような精神的土壌に民主主義は根付くのでしょうか。文明の対立とか文明間の対話とか言われて久しいです。この世の中には、色々な考えの人が住んでいますので、考えを一つにするなどということは、不可能です。お互いが、お互いのよいところを取り合って、「共存共栄」の精神で、お互いが切磋琢磨して、仲良く生きていくしかないのではないでしょうか。

死　海　　©LITHON

【最後に】

この写真は、ヨルダンとイスラエルの間にある死海です。海面下、約400メートルにあります。世界で一番低いところにある湖です。これは“決して沈まない湖”です。この死海のある地域、レバント渓谷は、北はレバノンから、南はタンザニアまで続く約4000キロに亘る大陥没地帯に位置します。この大陥没地帯で――アフリカですが――我々の祖先が生まれたわけです。宇宙は約137億年前に誕生し、地球は約45億年前に出来て、約600万年くらい前に、いわゆる2本足で立つ人類が生まれ、我々、即ちホモ・サピエンスは、今から約20万年前にアフリカの大陥没地帯のどこかで生まれました。DNAの研究によれば、われわれの祖先は、あるひとりの女性に突き当たります。学者は“ミトコンドリアイブ”という名前をその女性につけています。この女性が今世界の約65億いる人類の共通の母親なのです。その後、アフリカ生まれのホモ・サピエンスは、アフリカを出て、世界に散らばっていくのです。はじめは、コーカサスあたりにまで来て、ひとつのグループはヨーロッパへ、他のグループは東に行き、ある者は、ベーリング海が陸地で繋がっていた頃に、アメリカ大陸の南端まで行きました。今から1万5000年くらい前のことです。また、ある者は、北アジアにきて、そして日本まで来ました。少なくとも今から3万5000年前頃の話しです。

地図でおわかりの通り、この地域、中東というのはまさにこの人類、ホモ・サピエンスがアフリカから世界に旅立った時に通った道なのです。要するに、全人類の母親が、先ほど述べたミトコンドリア・イブだとすれば、この地球上にいる人たちは、皆兄弟ということになるわけです。これは遺伝学的に言えば正しいことなのです。ただ、住む自然環境の違いによって、人間の体が気候に適応する形になったり、また、社会的な要因によって体型が変わっていったということになります。例えば中東では女性はある程度小太りの人が好まれます。その方がふくよかであるという認識がありますので、女性も遠慮なく太る、ということなのです。いずれにしろ、そういう社会的な要因とか、気候とかいうものによって、地域的特徴を持つ人種が生まれてくるわけですが、少なくとも遺伝的に言えば、この地球に住んでいる人たちは皆兄弟であるということです。この認識は、この世界の平和を願う際には、非常に重要なことではないかと思います。要するに今イラクで殺されている人たちも、アメリカ人も含めてですが、言ってみれば、皆我々の兄弟であるという認識です。これは、人々が平和に向かって歩んでいく、ひとつの重要な視点になるのではないかと思います。私は、この死海を見ながら、強くそう思いました。

異文化に接し、いろいろな意味での驚きがあるはずです。その際「日本ではこんなことはない」といって、そこで思考を停止させるのではなく、「何故、こんなことがあるのか」、「こんなことがあるのは、そこの社会で、それなりの理由があるはずだ」、「その理由は何なのか」、とったことを探り、まず、それをあるがままに受け入れ、つまり、「この社会では、こうなのだ」と、受け入れ、その上に立って、日本との違いをしっかりと見極めていく、ということが大事なのではないかと思います。そしてその

違いというものを知るということは、とりもなおさず、「じゃあ、日本とはなにか。日本人とはなにか。自分とはなにか。」というところに考えが及んでくるのだと思います。これがまさに異文化理解の真髄ではないかと思います。

特に若い人たちには、是非海外に早い段階で行って欲しいと思います。自分の肌で異文化に接し、驚き、葛藤し、そして、自分なりに異文化を受け入れていく、この経験を早い段階でやることは、自分の生き方を考える上で極めて有意義なことと思います。